
セイニャン
と
パピプル
ビッグ
サプライズ

Credits

総合プロジェクトマネージャー
enaa /@Wa_sa_bii_

文章担当リーダー
nav not seca /@nya_vigator

ライター
Mika / @seiblingmika
Sachi /@r3ia_v
Kroffie / @Kroffie_ (X)
Style / @seinyawn (twitter)
Nicole / @lsyng171092
Wyn / @lostinthewyn (twitter)
Ahsokka-chan / @lobstertanks
deet / @deet283
Chianyan / @Chia_yeee (X)
PDnyan / @miniddalgis

校正/編集
Shrimpomax / @shrimpomax
Keiryn / Kumi
PDnyan / @miniddalgis
nav not seca /@nya_vigator

日本語翻訳
igayoukan / @drums_ig
Kof / @KofVellin(X)

製本制作
Tori Love / @_artbylove_
Meii Chiyu / @meiiishere

アート担当リーダー
Meii Chiyu / @meiiishere
Fluffy / @fluffyseinyan

アーティスト
Shiyu / @shiyunyaooo
marshnyan / @rarxddotcom
Mofumiruku / @mofumiruku
kovu / @capkovu
Eriasu / @eriasuanimation
juugo / @octako15
nevanyan / @neva_nabi
CTON / @chato_n2434
tohmanyan / @tohma_nyan
Rei Pyonnn / @rei_pyonnn (IG) / @P98181777 (twt)

挿絵協力
- Keiryn
- Peri
- Dewdropity
- わをん

目次



第一章 …… 5

第二章 …… 15

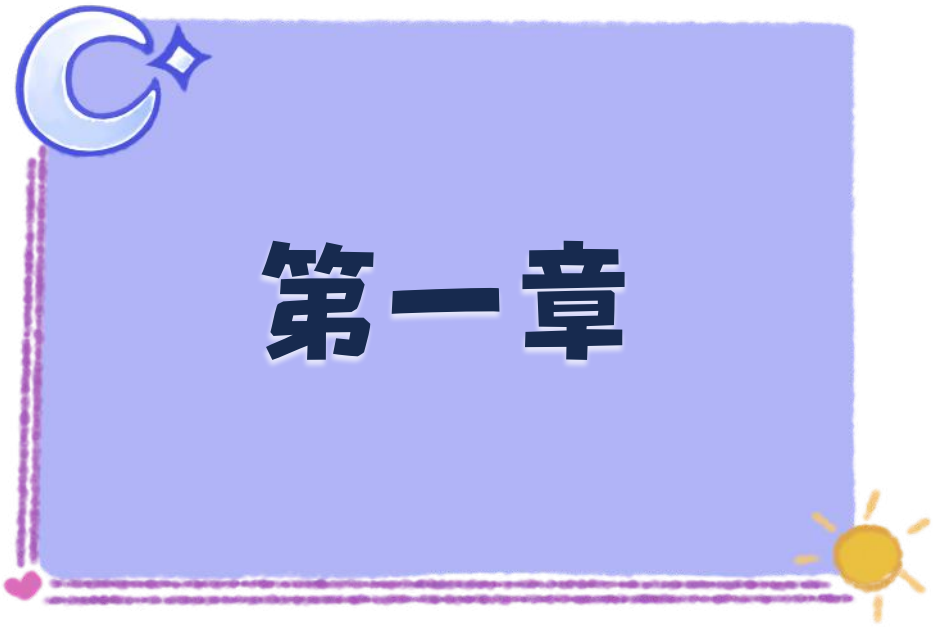
第三章 …… 36

第四章 …… 55

第五章 …… 71

第六章 …… 81





第一章

薄いカーテンの隙間から朝日が差し込みます。光の筋が降り立った先には、丸くなった三つの影。すやすや眠る白猫と、いびきをかく茶色い子犬と、二匹を愛するにんげんです。

セイブルが眩しさに顔をしかめます。まっすぐ射し込む日差しが、心地よいまどろみを壊そうとしていました。迫りくる朝から逃れるため、もふもふの相棒たちから少し離れ、光と反対側に顔を向けます。

セイニャンとパピブルもつられて身じろぎします。セイブルの体温が遠のいたことを惜しむように。やがて、しぶしぶ、どちらかが目を開けました。セイニャンが眠たげにぱちぱちとまばたきをすると、ぼやけた世界がゆっくりと姿を現します。



にんげんと相棒を見つけましたが、二人ともまだ静かに寝息を立てていて——しかも何センチも離れています。おぼつかない視界のまま、セイニャンはもぞもぞベッドの端まで這っていき、セイブルの首元に潜り込んで憎たらしい日差しから避難しました。

パピブルは目を開けないまま、まぶたを突き刺そうとする光から逃れるようにごろごろ転がります。シーツの大海原をどこまでも、どこまでも——やがてその海が途切れるとも知らずに。

体の下からマットレスが消えた瞬間、パピブルの目がカッと見開き、きゃんっと鳴きながら柔らかいカーペットに落ちました。

「いたた、いたたた……」と鳴きます。



「パピブル……朝から遊ぶのは早いよ……」セイブルがうめきます。

「んん……しゃべらないで、もっと寝る、にゃお……」セイニャンがあくび混じりに言って、セイブルにさらにぎゅっとくっつきます。

パピブルはぴしっと体を起こし、目をこすります。まだベッドにいる二人をじっとにらみました。よいしょとベッドによじ登り直します。

二人の前にどんと立ち、頭の中で企みが形になっていきます。セイニャンはまだ丸くなっています。何をしてもびくともしなさそうです……でもセイブルは——大きくて、無防備で、格好の的。

パピブルは大きく伸びをして、手足の眠気を振り払い、準備が整ったところで……飛びかかりました！

四本の足を大きく広げ、おなかを標的の上にさらし、セイブルの寝顔にどんぴしゃりで着地！

「うわあっ！」

セイブルが跳ね起き、パピブルとセイニャンがベッドの上に放り出されます。

二匹ともぽすんと着地しました。セイニャンは叩き起こされて朝の騒動についていこうと必死。パピブルは大笑いしています。

「もう……パピブル！」セイブルが叱ります。

「あはは！おはよう！僕が起きたら、みんなも起きるの！」

「パピブルなんで……あんなに気持ちよかったのに……」セイニャンがまだ半分閉じた目で愚痴ります。

パピブルが「セイニャンとセイブルに冷たい床で一人ぼっちにされた悲劇」を熱く語り出す前に、セイブルの目覚ましが大音量で鳴り始めました。

「はぁ……今さら怒ってもしょうがないか、どのみち起きなきゃだし」セイブルがため息混じりに言います。頭の上で腕を伸ばすと、関節がぽきぽき鳴って筋肉がほぐれるのに合わせて、やたらと大きな声が漏れました。

「もう行っちゃうの？」セイニャンがしょんぼりします。

「今日は僕たちと遊んでくれないの？」パピブルがセイブルの脚にちょこんと座りながら聞きます。

「残念だけど忙しい日なんだ、プロモーターの仕事があって」セイブルがパピブルのほっぺをむにむにします。「ギンちゃんとケイちゃんとフリちゃんに、僕の分まで仕事させるわけにいかないでしょ！プロモーターが宣伝しなかったら何て言われるか！」

パピブルはほっぺを揉まれながらじとっとにらみます。セイブルは笑ってほっぺ攻撃をやめ、頭を撫でることにしました。

「今日の服を選ぶの手伝ってくれたら、そのあと朝ごはん食べて、出かけるまでのんびり過ごそ！」

「ほんとに行かなきゃだめ？あんなに気持ちよかったのに……」セイニャンもセイブルの脚に前足を乗せてしょんぼり。

「だめだめ、そんな顔しないで、ほんとに行けなくなっちゃうから！セイニャーン……！」

セイニャンはセイブルの太ももにあごを乗せ、わざとほっぺをぷくっと膨らませて、とびきりのうるうる目を繰り出します。

「あぁっ！だめ！そういうのずるい！」セイブルが目を覆います。「集中しなきゃ！僕はめっちゃ強いセイブル、これには負けない！」

指の隙間からまだしょんぼり顔のセイニャンを覗き見て、きゅっと声が漏れます。「かわいいのやめて！」

「にゃ？なにもしてないけど？」

「ずるい！起きなきゃ！」セイブルは二匹のもふもふトラブルメーカーをそっと持ち上げ、近くの枕の上にちょこんと置きました。「やるしかない！」

セイニャンもパピブルも反応する前に、セイブルはベッドから飛び出してクローゼットまで一直線。

二匹はベッドから転がり落ちるように飛び出し、すぐさまセイブルに駆け寄ります。

「なんで出かけるの！」

「鬼プロモーター！僕たちのこと嫌いなんだ！」

「嫌いじゃないよ！仕事なの！うわー！」セイブルは急いで服を着ます。シャツ、ズボン、ネクタイ、全部てきとうに身につけながら、クローゼットで暴れ回る二匹をかわしていきます。

セイニャンが素早く床の靴下をくわえて奪い、パピブルは部屋から飛び出していきました——たぶんセイブルの靴にいたずらしに行ったのでしょう。

気づけば、片方しか靴下を履いていないセイブルが小さなセイニャンを見下ろしています。「セイニャン……靴下返して」





「やだ」

「セイニャン……」

セイニャンは靴下をしっかり握りしめ、セイブルがどう引っ張ろうと意地でも離す気がありません。

セイブルはしゃがみ込み、靴下のことは一旦忘れてセイニャンの柔らかい耳をそっと撫でました。

セイニャンはたちまちセイブルの手にとろけ、すっかり油断して、靴下を握る力も緩んでいきます。

セイブルはこっそり靴下を回収してポケットに突っ込み、ごろごろと喉を鳴らしながらセイブルの手に夢中なセイニャンを見てくすくす笑いました。

「セイニャン、取引しよう。今日、僕はライブハウスに行く……帰ってきたら、セイニャンとパピブルの特別な日をちゃんとお祝いしよう。どう?」

セイニャンがぴくっと耳を立てます。「特別な日?」

「覚えてないの?誕生日だよ!」

セイニャンはまだぽかんとしていました。

「ごはん食べながらカレンダー見せてあげるよ!あとパピブルどこ行ったかな。ちょっと……静かすぎる」

セイブルはセイニャンを抱き上げ、鎖骨のあたりにすりすりさせてやりながら、二人でキッチンへ向かいます。パピブルはすでにそこにいて、必死にしらを切ろうとしていました。

「ほら、セイニャン、パピブル、今日何の日か見て?」セイブルが冷蔵庫に貼ってある壁掛けカレンダーを指さします。「きみたちにとって特別な日だよ!」

二匹はカレンダーを見ました。たしかに、6月29日に大きな赤い星がついています。とっても特別な日です。

セイニャンとパピブルの頭の中で歯車が回り始めました。特別な日……お互いのための……。セイニャンはこの半年間にパピブルが好きだと言っていたものを片っ端から思い出し始め、パピブルはセイニャンにまったく新しいサプライズを贈ることで頭がいっぱいになっていました。

セイブルはセイニャンを片手で抱えたまま、もう片方の手で朝ごはんの支度をします。トースターに食パンを入れるのも器用に片手で。

セイニャンとパピブルはまだお互いへのプレゼントに夢中です。トースターがポンと跳ねる音の向こうに、二匹の思考がぐるぐる巡っているのがセイブルにはほとんど聞こえるようでした。パンを焼きながら、そっと微笑みます。



絵に描いたような家族の朝ごはん風景。——セイブルの電話が鳴るまでは。

セイブルは慌ててセイニャンをテーブルに降ろし、電話に出ます。
「ケイちゃん?」

向こうから大きな声が聞こえてきます。「セイブル!どこにいるの!」

「今向かってる、ほんとに!」

「まだ家じゃん!俺のこと嫌いなの?By The Beat嫌いなの?!」

「嫌いじゃないよ!今すぐ出る!約束!」

セイブルは電話を切り、間違いなく始まりかけていた向こうの大噴火は無視して、トーストを口にくわえたまま家中をバタバタと走り回って支度を始めました。

「セイニャン、パピブル、留守番よろしくね!」廊下から叫びながら靴下を履こうとしています。「トースト食べて片付けといてね!夜には帰るから、大好きだよ、にゃんちゅー!」

「ばいばーい!」二匹が声を揃えて返し、ようやく空想から
戻ってきて朝ごはんにかぶりつきます。

二口食べたところで、玄関からまた叫び声が
響きました。「僕の靴どこー?!」







第二章

「ねぇ！どうしてセイちゃんにそんなことするの、パピブル！？」

「セイちゃんの帰りが遅くなって、私たちの誕生日を祝ってもらえなくてもいいの？」

ちょっぴり困った顔のセイニャンは柔らかい肉球でパピブルをポンとこずき叱りました。

パピブルは呆気にとられながら

「え、なんで僕が責められるの！？ セイニャンだってクローゼットでセイちゃんを足止めしてたじゃん！」と反論します。

セイニャンは一瞬たじろぎ、耳をピクピクさせましたが、すぐに見栄を張るようにフンッと胸を張りました。



「そ、それは……！でもパピブルの方がもっといーーっぱい迷惑かけたでしょ！」
「してない！」
「した！」
「してないっ！！」
「したっ！！」
二匹が息を整えると、セイニャンは諦めたように前足を上げて言いました。
「もー！わかったよ！もう食べよう！私たち二人とも悪い、それでいいでしょ！？」
「ふん、わかったよ！ どうせ僕だってもう飽きてきてたし」
パピブルは鼻を鳴らしぷいっと顔をそむけると、セイニャンなんてそこにいないかのようにそっぽを向いてトーストを食べ始めました。



「ぅぅっ……」

その様子を見たセイニャンのしっぽが、イライラするようにピクピクと動きます。

そして、あてつけるように自分もそっぽを向いてしまいました。

セイニャンはトーストに向き合ったものの、今のやりとりで食べる気力がなくなってしまい、ただぼんやりと肉球でトッピングをつつくだけ。

「……ぷっ……」

ベリーをお皿に弾き落とそうとしたセイニャンは、その声に耳をぴんと立て、

「何がおかしいの？」

と、ジト目でパピブルをにらみます。

パピブルは食べる手を止めると、いたずらっぽい笑みを浮かべて、顔についたクリームチーズを拭き取りました。

「なんでもないよ。ただ、こんなちっちゃなことで言い争ってたのが、なんだかおかしくなってきちゃって」

「まぁ……始めたのはパピブルだけどね」

セイニャンはフンッと胸を張って前足を組みました。

「あはは……そうだったっけ？」

パピブルはため息をつくと

「それでも、僕たちがいくらケンカしたって、僕たちの絆は絶対に引き裂けない。でしょ？」

セイニャンは不思議そうに首を傾げました。

「え、なんでそんな当たり前のことわざわざ聞くの？そんなこと、10億年……ううん、何兆億年たったって絶対にありえないんだから！」

「良かったぁ～……」

パピブルは愛おしそうに微笑み、その小さな両前足でベリーをセイニャンの口に運びます。

「さぁ、食べちゃお！じゃないと僕が食べちゃうよ～！」

セイニャンは不満そうになにかぶつぶつ言うと、ベリーをパッと掴んで食べ始めました。

「前足どけて！このあとのためにエネルギーが必要なんだから！」

だけどもなんだか、さっきより嬉しそうです。

パピブルは自分の食べ終わったお皿を掴み、片付けにトコトコと歩いていきました。

「はいはい、ごゆっくり～」

それから、キッチンはゆっくりと静けさを取り戻し、お皿を洗う水の音とトーストを頬張る音だけが部屋に響いていました。

セイニャンは空っぽになったお皿をみつめ、パピブルのところまでずるずると引きずっていきます。

ちょうど自分の分を片付けたパピブルは、それを見てふぅとため息をつきました。

「あとで片付け一緒にやってくれるよね？」

「はぁ～い」とセイニャンは鼻歌混じりで水を飲みに去っていきました。

パピブルはセイニャンを見送ると、ふと、冷蔵庫のカレンダーに輝く真っ赤な星、そしてシンクの奥の窓、優しく迎えるような明るく澄んだ空に目を向けました。

雲のひとつがどういうわけか、まるでセイちゃんがセイニャンを抱きしめているように見えます。

パピブルはそれを見て微笑みました。

「あれからもう一年経ったんだ……」

するとパピブルは不思議と元気がでてきて、セイニャンの食器を洗い始めるとさらに元気が溢れてきました。

「たしかセイちゃんは夜までは帰ってこないって言ってたよね？よし、この特別な日を最高にするんだ！」

パピブルは笑顔でつぶやき、

「二人をハッピーにするために！」



その頃、セイニャンはリビングに着くとすぐに、薄紫色の水飲み器へスキップして向かい、ゴロゴロと喉を鳴らしながら水を飲み始めました。

水を飲んでいると、新居に引っ越してすぐの頃、セイちゃんがプレゼントやお菓子をたくさんくれた時のことを思い出しました。

その時のセイちゃんが、自分が空っぽになるくらい無理をしていることに気づいて、パピブルが心配して怒って大騒ぎしたことを、今でも鮮明に覚えています。

でもセイちゃんは、セイニャンとパピブルがハッピーならそれでいいんだ、と笑顔で答えたのです。

「君たちのためなら何でもしたいんだ！だから、僕の愛を受け入れて！」と。

セイニャンは飲むのを止めると、いつもつけているリボンを見つめ、中央にある白い星と三日月形のエンブレムを肉球で撫でた後、部屋を見回しました。

セイニャンの視線は、昔絡まってるところをパピブルが助けてくれた、もつれた毛糸玉で止まりました――

「にゃあああああ！これ外してパピブル！！」

「やれやれ、動く”にゃあ”ってば！どうしたらこんな絡まるの？」

「今は冗談言ってる場合じゃないのパピブル！」

これはある時セイちゃんがプレゼントしてくれたペアのぬいぐるみ――

「これがシリウス？ずっと自分の目で見てみたいと思ってた、シリアスに！本当に！」

「わあ～！☆どうして私がダイヤが好きなの知ってるのセイちゃん！？」

「ふふーん、それは秘密！」

――ここには小さくても大事なもの、セイニャンが永遠に大切にしたいと願う思い出が隅々まで詰まっています。

そして、セイニャンは一つの願いを抱きました。

「セイちゃん…パピブル…二人は私にたくさんのものをくれた」

セイニャンはきゅっと顔を引き締め、

「私たちの誕生日を、これまでで一番思い出に残る日にしたい……いや、絶対に最高の日にするの！」

そうして考え事にふけっていたセイニャンは、背後に忍び寄る茶色い影にさえ気づいていませんでした。

影はつま先立ちで近づいてきて……



「ばあっ！」

パピブルは叫びフワフワなセイニャンに前足で飛びかかります。

「きゃあああ！！なに！？パピブル！！」

セイニャンはパピブルをぺちぺち叩き、地団駄を踏みながら

「何するの！？笑わないでよ！面白くなんかないでしょ！」

「ふぅっ！あ、あは、ぷはっ、おーにょー！ははは……立ち上がれないや！はぁ、面白い……ごめんね、セイニャン」

パピブルは立ち上がろうとしましたが、なかなか立ち上がれません。

二匹はお互いを見合って大笑いしだしました。

セイニャンは眉をひそめ、逆立ったしっぽをなぐさめながらぶつぶつと

「もう！からかわないでじっとしていられないわけ？」

「ごめんって～、ね？さっきから呼んでたんだよ？何そんなに考え込んでるの？」

パピブルは少年のようなウキウキワクワクした笑顔でセイニャンの隣に並びます。



セイニャンはもう～と上を向きますが、すぐニッコリと

「今日はセイちゃんのために何かすごいことをしようよ！一生忘れられない一日にするの！」

「えぇ？それってつまり、ダブルサプライズ！？」

「そう！」

パピブルはしっぽを嬉しそうにブンブン振りました。

「じゃあさ！今すぐ買いに行こう！セイちゃんの好きなものとセイニャンの好きなもの！ぜーーーんぶ！」

「えぇっ？」

急に走り出そうとするパピブルの前足をセイニャンが掴みます。

「えぇっ？？」パピブルはオウム返ししてセイニャンに振り返ります。

「私は今あるもので作ろうと思ってたの。新しく買わないでとっておいた飾りとか再利用してさ！」

セイニャンはため息をつき頭を抑えながら

「それに、お金もないし！」

「いや、あるじゃ～ん」

パピブルの言葉の裏にあるいたずらっぽい響きを感じ、セイニャンはためらいがちに手を離しました。

茶色い前足には、何か……長方形で……プラスチック製の……『あれ』が……しっかりと握られていました……？

「まさか！それってセイちゃんのクレジットカード！？！？」

セイニャンはゴクリと喉を鳴らし、

「い、いつのまに！？」

「セイちゃんが仕事に行く時に財布から『借　り　た』んだ、これくらい大したことないよ～」

パピブルは得意げに鼻をこすりながら言いました。

「じゃ、じゃあ……！」

セイニャンは一瞬ためらいながら浮かべた笑顔を、ゆっくりとしかめっ面にしていきます。

「ううう～……本当はさっき言った計画進めたいんだけどな…でもお買い物も飾り作りもなんて一緒にはムリ！そんなことしてたら永遠に終わらないよ～」

二匹はどうしたらいいか考え込み部屋はシーンとしましたが、それもすぐにやぶられます……

「ねえ、二手に分かれない？」

パピブルはシンプルな答えを出しました。

「……悔しいけど、なんで妙に説得力があるんだろ？」

セイニャンはつぶやきます。

セイニャンはその考えを振り払い、決意に満ちた笑みを浮かべます。

「よし！そうしよう！でも……条件がいっこあるの！」

パピブルの耳がピクッと動きました。

「おぉ、勝負？」

「完成するまでお互いのやってることは絶対に見ないこと！」

セイニャンは前足を組んで言いました。

「トリプルサプライズ！まずセイちゃんから私たちに、次は私たちからセイちゃんに、そして最後はお互いに！」

「おぉ！キッチンは僕が先にもらうよ！」

パピブルは点呼のように肉球を上げました。

「おっけー、じゃあ私は物置部屋にしようかな！」

セイニャンはふざけるパピブルにクスクス笑いかけました。

二匹は一秒も無駄にしまいと、反対方向に駆け出しました。

まさか自分たちの計画があんなことになるなんて、二匹は全く気づいていませんでした……

- セイニャン編 -

物置部屋の奥の隅っこで箱が激しく揺れています。

「……んんーーっ……」

積み上げられた収納ケースの山の中から、くぐもった声が聞こえたかと思うと、突然、ケースの間から蹴り上げる両足が突き出てきました。

「誰なの！？こんなに高く積んだのは！？」

山の中からセイニャンの不満げな声が響きます。

山が危なっかしくグラグラと揺れ、

小さな肉球がひょっこり現れては、

また消えます。

狭い部屋に、再びガサゴソと激しい音が響き渡ります。

そしてついに、セイニャンは大げさに息をのんで、山から後ろ向きに転がり出てきました。

頭の上から数本のリボンや紙の切れ端がひらひらと降ってきます。

「ぺっぺっ！ ほこりっぽい……」

セイニャンはぷくーっとほっぺを膨らませ、すぐに部屋を見回しました。

散らかり放題の状況にもかかわらず、その瞳はキラキラと輝いています。

物置部屋の中は、文字通り忘れ去られた思い出で溢れかえっていました――

前に使った誕生日ガーランド 未使用のラッピング用紙

明らかに小さすぎるケースに無理やり詰め込まれた工作道具

セイちゃんが「万が一のために」って言って譲らなかった小さい大事なガラクタたち

パピブルが紙で星を作ろうとして失敗した残りさえも、このごちゃ混ぜの中に詰め込まれてる……

最高……

山を掘り始めるとセイニャンのしっぽが嬉しそうにパタパタと揺れました。

すべてのピースが組み合わさったらどんなに綺麗だろうと、頭の中ではすでに想像できています。

「これは窓の近くに置いて……あ！ 星のライトはあそこに掛けられるかも……」

リボンやガーランド、飾り紙の切れ端などを丁寧に仕分けながら、セイニャンはひとりごとを呟きます。

別の箱を開けると、思わず小さく息をのみました。

中には昔のポラロイド写真や、いつかパピブルが間違えて踏んづけたドライフラワー、そしてのりの跡がゆがんでるのに、セイちゃんが捨てるのを嫌がった、何ヶ月も前に手作りしたバースデーハットが入っていました。

「本当に何でも取っておくんだから……」

セイニャンは優しく微笑みました。

愛おしい思い出が詰まったものたちを小さな肉球でそっと撫でます。

が、ふと動きが止まります。

待てよ……

「……あ！」

セイニャンはハッと顔を上げます。

勢いよく振り向くと、別の収納ケースの山へと突進し、よし!と気合いを入れ直して中をあさり始めました。

「こっちじゃない、あれー…どこに置いたっけ……？ ここにあるはずなんだけど!」

箱のフタが次から次へと開けられ飾り紙があちこちに舞いちりそしてついに……

「あった!」

セイニャンははぎれの山の底から、小さなパステルカラーのカメラバッグを引っ張り出しました。

その瞬間、セイニャンの表情がホッと和らぎました。

ストラップに結ばれたリボンは今では少しほつれてしまっているけれど、セイニャンはセイちゃんがプレゼントしてくれた日のことを、今でも鮮明に覚えています——

「セイニャンはいつも、いろんなものをすごくじっくり見てるよね」

あの時、セイちゃんはそうあたたかく笑いかけてくれた。

「だからさ……君も思い出をのこすのが好きなんじゃないかって思ったんだ」

その時は、それがどういう意味なのかよくわかんなかった。

でも、いつの間にかこのカメラはかけがえのないものになってたんだ。

ブレブレの写真も

知らない間に撮れてた写真も

パピブルが笑い転げている日常の瞬間も

セイちゃんの隣で過ごす眠たい朝も

セイニャンが「ずっと続けばいいのに」

と願ったなにげない思い出のすべてが—

ここに大事にしまわれていました。

そして今日……

今日は、これを二人と分かち合いたい特別な日。



セイニャンはバッグから慎重にカメラを取り出し、どこか誇らしげな笑みを浮かべていました。「今度は二人に全部見せてあげるんだから……」

カチッ

何も起きません。

セイニャンはパチクリと瞬きをしました。

「ん？」

セイニャンはもう一度ボタンを押してみます。

カチッ

ほんの一瞬、画面が弱々しくちらついたかと思うと、すぐに砂嵐になってしまいました。

カメラのレンズからバチバチッという嫌な音が聞こえ

辺りは静まりかえりました。

セイニャンの顔からみるみる笑みが消えていきます。

「……え？」軽く振ってみたり

別のボタンを押してみたり

何度も

何度も……

「お願い……ついて……」

弱々しいちらつき。

レンズが前に出かけたところで、ガリッという嫌な音を立てて詰まってしまいました。

セイニャンは凍りつきました。

その後、どれだけボタンを押しても……

反応が返ってくることはありませんでした。

物置部屋の中が、急に恐ろしいほど静まり返ったようでした。

「……やだ……」



カメラを握るセイニャンの前足にぎゅっと力がこもります。

「だめ、だめだめだめ……」

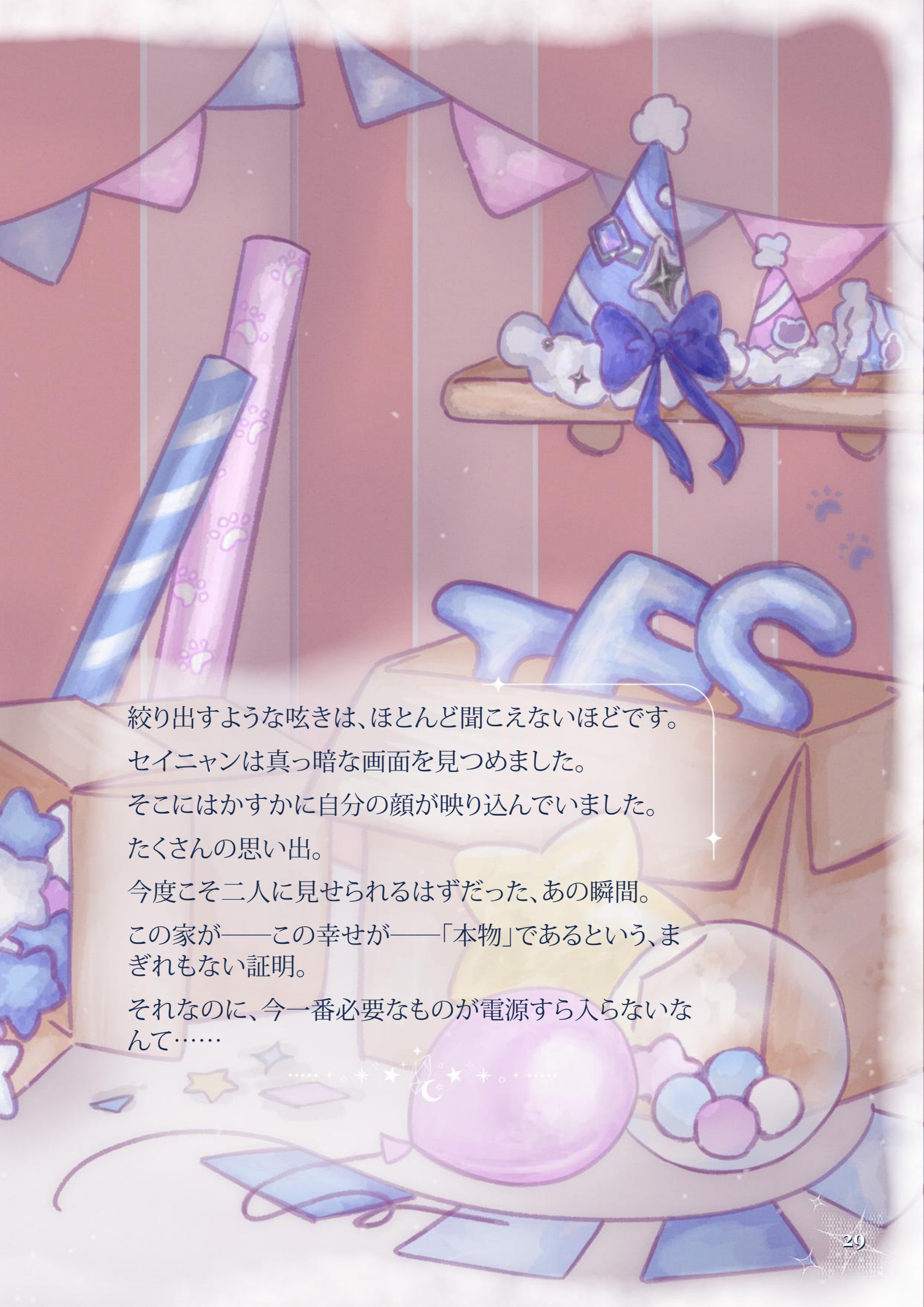
セイニャンは慌ててカメラのあちこちを確かめますが、確かめれば確かめるほど、その耳はへにょへにょと垂れ下がっていくのでした。

角にひびが入っています。

バッテリーのフタも少し緩んで浮いています。

どうやら、収納ケースの山のどこかで押しつぶされてしまっていたようです。

「……壊れてるの……」



絞り出すような呟きは、ほとんど聞こえないほどです。

セイニャンは真っ暗な画面を見つめました。

そこにはかすかに自分の顔が映り込んでいました。

たくさんの思い出。

今度こそ二人に見せられるはずだった、あの瞬間。

この家が——この幸せが——「本物」であるという、まぎれもない証明。

それなのに、今一番必要なものが電源すら入らないなんて……

- パピブル編 -

パピブルは一秒だって無駄にしません。

セイニャンが物置部屋の方へと姿を消した瞬間、パピブルはすでに動き出していました。

ワクワクが止まらず、肉球が床の上ですべるのも構わずに駆け出します。

最初は計画なんてシンプルそのものでした。

外に出かけて、飾りを買って、この特別な日を完璧にするために必要なものを全部揃える。

けれど、キッチンに立ち、戸棚とそこに溢れる無限の可能性をじっと見つめているうちに、パピブルの心の中で何かが変わりました。

「待てよ……」

パピブルは立ち止まり、小さく呟きます。

パピブルは耳をピクッと傾けて、もう一度あたりを見回します。

もしかしたら、わざわざ外に出かける必要なんてないのかもしれません。

だって、ここには何でも揃っているんですから。

おいしそうなもの、カラフルなトッピング、たくさんの材料、色々な形の抜き型、甘いもの、キラキラしたもの。

これなら、飾り付けだって全部ここで作れそうです。

パピブルのしっぽの振りがどんどん速くなっていきます。

「そうだよ……これ、全部使っちゃえばいいんだよ」

パピブルはそう決めると、にやりと悪巧みのような笑みを浮かべました。

「その方がずっといいじゃん」

次の瞬間、キッチンはあっという間に彼の世界になりました。

「おおぉ……これは絶対に最っ高のものができるぞ……」

すっかりその気になったパピブルは、ボソッと呟きました。

パピブルは戸棚を次から次へと開けては、小麦粉、砂糖、生クリーム、フルーツ、チョコレート、シロップなど、何か楽しいものに変身しそうなものを片っぱしから引っ張り出していきました。



ボウル、泡立て器、スプーン、お菓子作りの道具……

引き出しからはほとんどのものが引っ張り出され、まるでパピブルにしか分からない、どんどん膨らんでいくアイデアのピースのように、カウンターいっぱいに広げられていきました。

「完璧」

即座に呟き、パピブルは目をキラキラと輝かせました。

パピブルにもう迷いはありません。

外に出かける計画なんて、すっかり頭から消えていました。

あるのは、自分とこのキッチンがこれからどう生まれ変わるか、ただそれだけです。

「材料が多ければ多いほど＝もっと美味しくなる！」

パピブルは自信たっぷりに、うんうんと頷きました。

中央に大きなボウルをドンと置き、さらにもう一つ、さらに大きなボウル、と重なり合うのもお構いなしに置いていきました。

そうしてカウンターはあっという間にメチャメチャな作業場になってしまいました。

ですが、パピブルの頭の中では、すべてがちゃんと繋がっていました。

「よし……これで特別なものを作るぞ」

パピブルはさっそく取りかかりました。

小麦粉も砂糖もフルーツもチョコレートも、順番なんてお構いなし、分量なんてはかりません。

とにかく目についたものをどんどん放り込んでいきます。

あるのはただ、子犬の野生の勘と、抑えきれないワクワク感だけです。

「楽しければ、なんだって上手くいくんだ」

パピブルはそう呟きながら、泡立て器で混ぜるスピードをどんどんどんどん上げていきます。

混ぜ合わされたドロドロの液体はだんだんと形を変え、だんだんと重くドッシリと……どういうわけか、普通のお菓子ではあり得ないような、奇妙でカラフルな色合いに変わっていきました。

けれど、パピブルは止まりません。

それどころかますます楽しくなっているようです。

パピブルはセイちゃんが時々使っている、お菓子が作れる小さな機械のところへトコトコと向かいました。

高級なものではないけれど、見慣れた機械です。

「へへっ、これを使えばもっと良くなるぞ」

パピブルはニヤリと笑って、
コンセントをカチッと差し込みました。

静かにブーンと落ち着いた音を立
てて動きはじめました。



パピブルはためらいません。

混ぜ合わせた生地をさらに流し込み、トッピングもどんどん足していきます。

これでもっと良くなると1ミリの疑いもなく。

けれど、パピブルが足せば足すほど、機械の様子がおかしくなっていきました。

ブーーンと、唸るような音がどんどん大きくなっていきます。

そしてカタカタカタ……と、機械がかすかに震え始めました。

「……あれ？」

パピブルは首を傾げましたが、それでも手を止めません。

「あと、もうちょっとだけ……！」

ついに生地が溢れ出し、機械の縁からドロドロとこぼれ落ちていきます。

機械が怪しい光を放ち、どんどん眩しさを増し、今にもなにかが起こりそうです。

さすがのパピブルも一歩後ろに下がりました。

「……ま、まあ、これくらい……普通だよね？」

シーーーン……

……次の瞬間、機械がガタガタガタッと激しく震えだしました。

「う、嘘……ダメ、ダメダメ……っ！」

ですがもう手遅れ。

ドッカーーン！！

凄まじい破裂音とともに、ぜんぶ外へと吹き飛びました。

小麦粉、生クリーム、フルーツ、そして混ざりきっていないドロドロの謎の生地が、まるで大津波のようにキッチン中へ噴きだしていきます。

お菓子になるはずだったものと飛び散った材料の嵐が、容赦なく部屋中のすべてを覆い尽くしていきました。

パピブルはよろよろと後ずさりし、目の前で起きた大惨事をただ呆然と見つめ、耳はペタンと垂れ下がってしまいました。

「嘘だ、そんなぁ……上手くいくはずだったのに……」

パピブルの声はさっきまでの勢いが嘘のように、今にも消えてしまいそうです。



「僕はただ……最高なものを作りたかっただけなのに……」

パピブルは、自分が作り出してしまった”おかし?”を見つめます。

頭の中では完璧なサプライズになるはずだった最高のアイデアは、見ていられない姿に変わり果てていました。

「……どうして、こんなことになっちゃったんだろう?」

めちゃくちゃになった部屋の中に、重く、静かな沈黙が立ち込めます。

「ねえ、どうして……なにがいけなかったの?」

役目を終えた機械がゆっくりと静かに動きを止めます。

あとに残されたのは、大きな野望が造りだしたお菓子とは言えないなにか。

そして、いつもならすぐに切り替えて元気に行動しだすはずのパピブルも、この時ばかりはその場から動くことができませんでした……

第三章



あの瞬間から、セイニャンは少し様子が変わりました。

何かの途中でふと立ち止まっては、突然叫び出します——

「あっ！これもいいかも！」

「待って！こっちの方がもっといい！」

ペンを握りしめ、頭の中を跳ね回るアイデアを片っ端から書き留めていきます。

紙はどんどん積み重なっていきます。ひらめきに止まる気配はまるでありません。

書かれていたのはこんなもの：

- 一年分のキャラメルラテ
- 月の光のかけらで作る、光る子犬用の首輪
- 百段パンケーキタワー
- パピブルを連れて星型キャンディを食べに行く
- 「セイニャンの一日専属おせわ係」クーポン

でも書き続けるうちに……アイデアは少しずつ暴走し始めました：

- プロモーターの首に巨大リボンを巻いてプレゼントにする
- ドラゴンをレンタルして一緒に乗る
- 世界中にキャラメルラテの雨を降らせる

書いている途中で手を止め、ちょっと考えます。

「……さすがにこれはやりすぎかも」

でも、とりあえず書いておきました。

数時間が経ちました。紙は増え続け、やがて小さな山になりました。セイニャンはその山を三秒間じっと見つめます。それから静かに、箱を探しに行きました。

とても、とても大きな箱。
自分よりも背が高い箱。

一枚一枚、紙を拾い上げて中にしまっていきます。かさかさという柔らかな音が箱の中に響きます。まるで願いごとがぎっしり詰まっているみたいに。蓋を閉じてから、てっぺんをそっと撫でました。




SECRET

でも問題はすぐにやってきました。巨大な箱のそばに座り込み、膝を抱えて、耳がほんの少しだけ垂れます。

「……一個だけなんて、どうやって選ぶの？」

いつもなら、何かあったら真っ先に話すのはパピブルです。でも今回だけは、それができません。

だって……

サプライズは、バラしちゃいけないから。

眉をしかめてしばらく考え込みました。すると突然、目がぱっと輝きます。

「あ！そうだ！誰かに相談すればいいんだ！」

うきうきと飛び上がり、くるっと振り返ると、巨大な箱を全力で押し始めました。箱はゆっくり前に進みます。ちょっと斜め。ちょっとぐらぐら。でもセイニャンの表情はずっとキラキラしていました。心の中で、この突然の冒険にぴったりな名前をつけます——

「パピブルの誕生日プレゼント相談の旅」

—

最初の目的地はドレミンです。

巨大な箱をようやくドレミンの前まで押していったとき、セイニャンは完全に息切れしていました。

ドレミンがぱちくりと目を瞬かせます。

「……これなに？」

「誕生日プレゼントのアイデア」

「……ひとつ？」

セイニャンは首を横に振りました。

「ぜんぶ」

ドレミンが一秒間黙り込みます。

「……ぜんぶ？！」

箱が開きました。次の瞬間、紙が滝のようにあふれ出します。

「うわあああああ――!!」

ドレミンが反応する前に、小さな体がメモの雪崩に飲み込まれました。紙の山からひょこっと顔を出し、二回まばたきして、それから大笑い。

「じゃあ……一枚ずつ読んでいこっか」

こうして二匹の小さな生き物は草の上に座り、前代未聞のブレスト会議を始めました。

―

「一年分のキャラメルラテ」

「それ、けっこういいね」

「百段パンケーキタワー!」

「崩れない?」

「プロモーターにリボン巻いてプレゼントにする!」

「だめ」

「ドラゴンレンタル!」

「どこで借りるの?」

「空からキャラメルラテの雨を降らせる!」

「みんな地面にくっつくよ」

―

二匹はしゃべりながら笑い転げました。

大事に残すアイデアもあれば、即座にバツをつけるものもありました。そしていくつかは、ドレミンが正式に命名した「セイニャン専用カオスコーナー」にそっと仕分けられました。

時間がゆるやかに流れていきます。紙は草の上にどんどん広がり、笑い声もどんどん大きくなっていきました。

そのとき突然――

びゅう――!

強い風が野原を吹き抜けました。紙が一斉に
宙に舞い上がります。
「ぎゃあああああ――!!」
「アイデアがー!!」
二匹は飛び上がり、舞い散る紙を追いかけ
始めました。
木の枝に引っかかるもの。茂みの
奥に落ちるもの。そして一枚が、
ぺしっとドレミンの顔に直撃しました。
「うわっ――!」



ドレミンが顔から紙を剥がすと、両腕いっぱいにメモを抱えたセイニャンが覗き込んで一緒に読みます。

そこにはこう書いてありました：

「流れ星に花火コンサートを開いてもらう」

「……これもたぶん無理だよね」

「当たり前でしょ！！」

二匹はよろよろしながら紙を拾い集め、立っていられないくらい笑い転げて、最後には草の上にぺたんと倒れ込みました。息も絶え絶え。



「……やっぱり決められない気がする」セイニャンがぽつりとつぶやきます。

ドレミンが小首をかしげました。

「じゃあ……デボネアとザーペントにも聞いてみる？」

思いがけない提案に、セイニャンがぱっと起き上がりました。

「たしかに！あの二人にも選んでもらえばいい！ぴったり！行こ行こ！」

こうして二匹はもう一度、巨大な箱を押して出発しました。今度の道のりはずっと長かったのです。上り坂は押しても押してもびくともしません。下り坂では箱が暴走しかけます。木の根っこに車輪が引っかかることもありました。

そしてある地点で――

がたんっ！

箱がまるごとひっくり返り、紙がまた四方八方に散らばりました。

「ぎゃあああああ――！！」

二匹は世界一大切な宝物を守るように、必死で一枚残らず拾い集めます。

―

ようやく目的地にたどり着きました。でも角を曲がった瞬間――二匹は固まりました。

その先で、パピブルがデボネアとザーペントと楽しそうにおしゃべりしていたのです。

空気が一秒間、静まり返りました。

セイニャンがじわじわと固まっていきます。

「……どうしよう……パピブルもいる……」

小さな声でささやきます。しっぽがちょっとだけ揺れました。

「パピブルにバレたら、サプライズじゃなくなっちゃう」

ドレミンがうなずきました。

そして二匹は黙ったまま、巨大な箱をまた静かに元の道へ押し戻していきました。

帰り道、箱がもう一度ひっくり返りかけましたが、セイニャンがとっさに体を投げ出して押さえ込みます。

「……ぜったい成功させるんだから……」

声は小さかったけれど、ものすごく真剣でした。

—

元の場所に戻ったとき、二匹はもう紙には手をつけませんでした。

代わりに、ただ静かに並んで座ります。

「……もしかして、考え方がちがってたのかな？」ドレミンがやさしく聞きました。

セイニャンがきょとんと振り向きます。

「え？」

「一番すごいプレゼントじゃなくていいんだよ……」

ドレミンがふわっと微笑みました。

「パピブルが一番うれしいプレゼントを探せばいいんだよ」

その瞬間、空気がふっとやわらぎました。まるで月の光がゆっくりと降りてくるみたいに。

そして二匹はまた描き始めます。

クレヨンで。色鉛筆で。アイデアをスケッチして、紙飾りを切り抜いて、デザインを変えて、しっくりこなければ最初から描き直します。

何度も、何度も。

いつも笑いながら。

太陽がゆっくりと空を横切っていきます。星たちもそっと隣で見守っているようでした。

そしてついに、ぴったり同じ瞬間に二匹は手を止め、顔を見合わせました。にっこり笑います。

「これだ！」

一番ぶっ飛んだアイデアでもない。一番派手なプレゼントでもない。でも、パピブルのためだけに——パピブルだけのために作ったサプライズでした。

—

巨大な箱がもう一度閉じられました。中には、ボツになったカオスなアイデアたち、空を舞った紙たち、旅の途中のどたばた全部……そしてたくさんの笑い声。それから、二匹でようやく完成させた秘密の計画。

セイニャンが箱のてっぺんをそっと撫でました。

「今度こそ、ぜったいうまくいく」

ドレミンがぱちくりしてにっこり。

「パピブル、ぜったい気づかないよ」

二匹は顔を見合わせて明るく笑いました。サプライズを見たときのパピブルの顔を、もう想像し始めていました。



- パピブル編 -

しんと静まり返りました。パピブルはぐちゃぐちゃの部屋を見つめます。

「……うーん……」

だめだ。これじゃ全然だめだ。

「よし、なんとかする！まだ一日あるし！」セイブルやセイニャンが急に部屋に入ってきて、この惨めなプレゼントを見られさえしなければ大丈夫なはず！

……なわけないだろ、全然大丈夫じゃない！！

「うああ、どうしよう？！」

パピブルはうろうろ歩き回ります。耳はぺたんと垂れ、しっぽは不安そうにぱたぱた揺れています。「どうしよう……」

パピブルはしょんぼり座り込み、鼻をすすりました。「ただ、喜んでほしいだけなのに……」

ふと止まります。「喜ぶ……」なんだろう、“喜ぶ”って聞くと何かを思い出すような――

……！

「あ！デボネア！！」

―

いつもと変わらない静かな日です。デボネアは退屈そうにため息をつきました。ケイリクスはライブハウスの仕事があるとかで、さっき出かけてしまいました。特別なお客さんが来るとかで、いつもより早く開けるらしいのです。

デボネアはふんっと鼻を鳴らします。一人ぼっちにされちゃったじゃん！

……まあ、本当に一人ってわけでもない。ドレミンやザーペントにちょっかい出しに行ってもいいし……セイニャンやパピブルに会いに―

「デボネア！！」ドアがバーンと開きました。ケイリクスのベッドでくつろいでいたデボネアは飛び上がり、お尻から床に落ちます。

「いたっ――！パピブル？！」デボネアはすぐに起き上がり、犬みたいな生き物を指さします。「なんでドア蹴り開けるの？！ノックって知ってる？！」

「ごめん、えへ……」パピブルがばつが悪そうに頭をかいてから、ぱんっと両手を合わせました。「それはそうと、今どのくらい暇？」

「……？」

「いや、そんな目で見ないで！聞いて、今日僕とセイニャンの誕生日なの知ってるでしょ？」

「え――そうなの？！やば、何も用意してない――」

「それはいいから！」パピブルはデボネアの申し訳なさそうな顔を手で払いのけました。「あのね、セイニャンにサプライズしようと思ってて……」

―

ザーペントはあくびをしながら床を滑り、キッチンへ向かっていました。コーヒーでも飲もうかな……

ジールは今日、ライブハウスに早く行かなきゃいけなくて、一人にされてしまいました。ちょっと寂しかったけれど、ザーペントはちゃんとしっぽを振って見送りました。

滑っていく途中、開いたドアの前を通りかかります。ちらっと目をやりますが、気にせず視線を戻しました。

……いや、待って。

ザーペントは急いで戻り、今度はちゃんと開いたドアの向こう――部屋の中をしっかり見ました。

中からなにやら騒ぎが聞こえます。近づいて、しっぽでドアをそっと押し開けながら目を細めました。

「――だめだって！」

「――いやでも聞いてよ――」

……聞き覚えのある声です。今度はそっと部屋の中を覗き込みました。好奇心には勝てなかったのです。

「……パピブル？デボネア？何して――」

「ザーペント？！」

「ザーペントあぶない――！」

……？！



反応する前に、カラフルな紙テープと紙吹雪がドアからどかんと飛び出してきて、ザーペントは思わずのけぞりました。さっきまで何もなかった廊下が飾り付けのゴミだらけになり、ザーペントはぽかんとまばたきするしかありません。

「えっと……」パピブルとデボネアがすぐにザーペントに駆け寄ります。パピブルが申し訳なさそうな顔でぺこりと頭を下げました。「ほんとにごめんザーペント！怪我してない？！」

「……大丈夫。気にしないで」ザーペントは微笑んでしっぽを振りました。デボネアが近寄り、ザーペントの頭に手を伸ばして紙吹雪のかけらをつまんで払ってくれます。

「で、何してるの？」

パピブルが口を開きかけましたが、デボネアが先に説明しました。「今日パピブルとセイニャンの誕生日なの。セイニャンにサプライズプレゼントを作ろうとしてて」

「へえ？」ザーペントが相づちを打ちます。「誕生日おめでとう。何も用意してなくてごめんね」

「ううん、いいの……」パピブルがしょんぼり鼻をすすりながら、部屋のぐちゃぐちゃを振り返ります。……そもそも何を作ろうとしてたんだっけ。

「プレゼント作り、うまくいってない感じ？」パピブルがこくんと頷きます。ザーペントがまた相づちを打ちました。

「あのね、セイニャンの好きなもの全部詰め込んでサプライズしたくて……パーティールームみたいなやつ！セイニャンの大好きなもの全部！でも――」ベチャッという音がしました。三匹が部屋の中を振り返ります。さっきまでケーキだったものが悲しそうに床に倒れ、フロスティングがそこら中に飛び散っていました。

「……」

「……手伝おうか、パピブル？」

「……おねがいします……」

「じゃあ、ストレートに聞くけど」デボネアがザーペントの言い方にぷっと噴き出しました。ザーペントが怪訝そうにちらっと見ます。

「セイニャンにサプライズプレゼントを作りたい？」

「うん」パピブルが頷きます。

「セイニャンの好きなもの全部で？」

「そう」

「で、こうなった？」ザーペントがぐるっと周りを見渡します。天井でふわふわ浮いてる風船、ばらばらに崩れた飾り付け、床のケーキはまだそのまま。誰も片付ける気になれませんでした。

「……うん」

ザーペントがため息をつきます。普段なら、パピブルとデボネアを放っておいてカオスを見物するところですが、今回はもう十分でしょう。

「わかった、持ってるもの全部教えて。リストとかメモとかある？」

沈黙。

「……まさか何も計画してないの？何一つ？」

「……」

「ほら、ぼくも同じこと聞いたんだよ！」デボネアが腕を組んで割り込みます。「そしたらにこーって笑って『自然の流れに任せる！』だって！なにそのてきとう――」

「わかった、じゃあまずそこからだね。全部片付けて、座って考えよう」

―

パピブルがぼんやりと手についたフロスティングを舐めています。デボネアがじとっとした目で見ていました。

「そのケーキ床に落ちたやつだよ」

「床についてない部分だけ取ったってば」

「床にあったことには変わりないでしょ――！」

「パピブル」ザーペントが言い合いを遮り、三十分前に急いで作ったメモをひらひらさせました。「アイデアの件なんだけど」

ザーペントがメモを（まあまあ）きれいな床に広げ、しっぽに赤マーカーを持ちます。「このアイデアとこれを組み合わせたらいけると思う。ただ、それだと二ページ目のやつはなしにしなきゃだめ。パーティールームをやり直すなら、日没まであと数時間しかないから今すぐ始めないと」

パピブルがうめき声を上げ、ばたんと仰向けに倒れます。「うぅぅ、パーティールームやり直したい！でも時間が……」

パピブルとザーペントが黙って考え込みます。デボネアは二匹を交互に見て、ふんっと息を吐きました。手を挙げます。

「発言していい？」

「なんで挙手……？」ザーペントが首を振ります。「まあいいよ、どうぞ」

「セイニャンとセイブルが帰ってくるまであと数時間しかない。パーティーを作り直したら、ぜったいに間に合わない――」パピブルが悲しそうにため息をつきます。「――だからね」デボネアがぐちゃぐちゃのメモを素早くめくり、最後のページで手を止めました。

「これ。さっきボツにしたやつだけど、残り時間で一番現実的だと思う」デボネアが二匹にそのメモを見せました。ザーペントが小首をかしげて考えます。「ん……たしかに、これならいけるかも」

デボネアがパピブルの方を向きます。「もちろん、ぼくの意見だけどね」パピブルはザーペントの前にあるメモを黙って見つめていました。「でもさ」デボネアが続けます。「もっと、パーソナルで、気持ちのこもったプレゼントの方がいいと思わない？」

「パピブルはどう思う？」ザーペントがかすかに微笑みながら聞きました。



リボンを持つ手が震えていました。白い空箱に巻くリボンを整え、息をついてから蝶結びにして、一歩下がります。セイニャンへのサプライズを入れるのにぴったりです。

「メッセージも書く？ケイリクスの引き出しにグリーティングカードの余りがあったよ」デボネアが色とりどりのカードを何枚かと、カラーマーカーを何本か渡してくれました。パピブルが頷きます。「うん……なんか書く」

「カップケーキはオーブンに入れたよ。あと十五分くらいかな」ザーペントが体についた小麦粉をはたきながら戻ってきました。

「ありがとう、ザーペント……」パピブルはつぶやきながら、まだ箱を見つめていました。ザーペントがそんなパピブルを見て、安心させるように微笑みます。

「ねえ、あんまり心配しなくていいよ。ぜったい喜んでくれるから」ザーペントがしっぽをそっとパピブルの背中に乗せて、落ち着かせます。

「一番豪華じゃなくたって、気持ちが大事なんだよ」デボネアがパピブルの肩をぽんと叩き、しっぽをパピブルのしっぽにくるりと巻きつけました。「お誕生日おめでとう、二人とも」

パピブルが震える笑みで頷きました。「うん」震える指で、デボネアからもらったカードに書き始めます（明るい青に紫とピンクのアクセント、金色の飾り付き。セイニャンを思い出すカードでした）。

「お誕生日おめでとう、僕たち」



第四章

セイニャンは大急ぎで立ち去っていくドレミンにばいばい！と手を振りました。

その胸には、たった今二匹で完成させたばかりの宝物を、ぎゅっと大切そうに抱きしめています。

セイニャンは数歩歩くたびに立ち止まっては、どんどん溢れてくるワクワク感に思わずクスクスと一人笑いを浮かべました。

「はやくセイちゃんとパピブルを泣かせt—じゃなくて、サプライズをみせたいなぁ……ふふっ」

セイニャンがふと顔を上げると、そこにはまだ星は灯っていないけれど、鮮やかで深い青色の午後の空が広がっていました。

太陽の光がまだ眩しいというのに、少し気が早い月が昇り始めていて、今日の月はどういうわけか、いつもよりずっと白く輝いているように見えます。

セイニャンはその美しさに目を奪われて、思わずその場に立ち止まりました。

そして、昔セイブルとパピブルと一緒に、これとよく似た空を見上げた時のことを思い出しました。

あの時の美しい空を見たセイブルの笑顔は、本当に眩しいお日様のような笑顔だったなぁ〜。

セイニャンにとって、セイブルの笑顔は、この世で一番美しい宝物のひとつです。

だけど、時々……セイブルの笑顔が消えてしまうことがありました。

セイブルはただ静かに上を仰ぎ見たまま、表情に影を落とし、瞳に寂しさをにじませてるのです。

そんな時、セイブルはとっても優しい声で自分にだけ聞かせるように小さく呟いたり、静かに鼻歌を歌ったり、あるいはただ、音のない中でじっと座っているだけのときもありました。

そんな姿を見た時のセイニャンとパピブルは、いつもなら喧嘩したりからかい合ったりしているのに、その時ばかりはピタッとやめて、静かにセイブルの膝の上へとよじ登って丸まって寄り添うのでした。そういう瞬間は滅多にないけれど、その度にセイニャンの小さな胸は、なんだか少しだけきゅっと苦しくなってしまうのでした。

セイブルは、セイニャンとパピブルのためにいつも一生懸命に働いてくれています。

そして、二匹に見返りを求めることはなく、めいっぱいの愛で包み込んでくれるのです。

だからこそセイニャンは、自分たちの最初の誕生日を、どうしても特別な一日にしたかったのです。

それは、今度は二匹からのありったけの大きな愛で、セイブルに「大好き！」を伝える絶好のチャンスだから。

セイブルに宿る暗闇を優しく照らす星の光でいたいから――

太陽が地平線の向こうへとゆっくり沈み始めた頃、セイニャンの想いは、パピブルへと移っていったのでした。

「パピブルはどんなサプライズを計画してるのかなぁ？」

今日のパピブルは、いつも以上にハイテンションで、ずっとそわそわとはしゃいでいました。

その姿にセイニャンは、パピブルと初めて出会ったあの日のことを思い出したのです。

……そう、ちょうど丸1年前のあの日のことを。

【回想】

それはそれは盛大に開かれた『セイニャン・サファイア・ソワレ』の夜のことでした。

セイニャンの小さな胸は、緊張と興奮で張り裂けそうなくらいバクバクと高鳴っていました。

セイニャンはセイブルのズボンの裾にぎゅっとしがみつきながら、月明かりに照らされてキラキラと輝く豪華な飾り付けや、銀色のドレス、まるで真夜中の空のような美しいブルーのスーツに身を包んだ、たくさんの人たちをうっとりと見上げていました。

セイブルは、一人ひとりに親しみやすい笑顔と優しく温かい声で挨拶をしています。

その一言だけで誰もがとろけてしまうようでした。

出会う人みんなから一瞬で愛されてしまう我らがプロモーターの姿を見て、セイニャンの胸の奥は誇らしさでちょっぴりふくらむのでした。

すると突然、セイブルはピタッと足を止めました。

セイニャンが不思議そうに見上げたその時です。

人々の足の間をすり抜け、テーブルの下をビュンビュンくぐり抜けながら、茶色いもふもふした「謎のなにか」がこちらに向かって猛突進してきます！

そして、二人のすぐ目の前で勢いよく止まりました。

それはまさにエネルギーの塊そのもの。

いたずらっぽい輝きでキラキラの瞳をした、元気いっぱいの子犬でした。

その姿にセイニャンは一目で「愛おしいな」と感じ、楽しそうに弾ける笑顔があまりにも眩しくて、セイニャンはクラクラしてしまうほどでした。

セイブルは愛おしそうに目を細めると、セイニャンの背中をそっと押しました。



セイブルは嬉しそうに続けます。

「セイニャン、君にパピブルを紹介するよ」

セイニャンは恥ずかしくなって、大慌てでセイブルの足の後ろに隠れ、元気すぎる子犬をそろりと覗き込みました。パピブルのピンクと薄青紫のしっぽが、カラフルにブンブンと激しく揺れています。パピブルはセイニャンにピョンピョンと跳ねるように駆け寄ると、元気いっぱいに挨拶します。

「ワンワン！ はじめまして、セイニャン！ 一緒に遊ぼう！」

「はじめまして！パピ―わぁっ！？」

セイニャンが挨拶を言い終わるより先に、パピブルは嬉しそうにセイニャンの前足をガシッと掴み、そのまま風のように駆け出したのです。

セイニャンの口からは、楽しそうな笑い声がプクプクと溢れ出し、いつのまにか最初の恥ずかしさなんてどこかへ消え去っていました。パピブルがテーブルの上にひょいっと駆け上がり、デボネアのお皿からドーナツをサッと盗むのを眺めながら、セイニャンの胸の奥で、経験したことのない不思議なあたたかい光がぽっと灯るのを感じていました。この胸のドキドキは一体何なのでしょうか？

「パピブルってすっごく可愛い……」

その呟きを聞いた瞬間、パピブルの耳がピクッと跳ね上がりました。パピブルは食べかけのドーナツをくわえたまま、ニカッといたずらっぽく笑って振り向きました。

「ううん、可愛いのはセイニャンだよ！」



突然の褒め言葉にセイニャンの白いほっぺが、一瞬で鮮やかなピンク色にぽっと花開きました。

セイニャンは大慌てでパピブルの口からドーナツを奪い取ると、そのまま一目散に走り出したのです。

「キャウンッ！？」と驚くパピブルの悲鳴を後ろにセイニャンはクスクスと笑いながら、パピブルの手を上手に避け、きらびやかなソワレ会場の中をすいすいと駆け抜けていくのでした。

そして、セイニャンの胸の中のくすぐったく優しい光は今でもずっと灯り続けているのです。

――それが二匹の初めての出会いであり、セイニャンの心に温かい光の種が初めて根を下ろした瞬間でした。

セイニャンは誕生日サプライズをもう一度胸に抱きしめました。

あの時のことを思い出すとセイニャンの胸は今でもキラキラとときめくのです。

パピブルが手を掴んだあの瞬間、セイニャンの緊張なんてどこかに溶けて消え去っていました。

そんなパピブルにセイニャンはすぐに惹きつけられたのです。

まるで同じ星雲から生まれた星のよう、まるで同じ星の欠片のよう。

パピブルのこととなると、セイニャンは胸の奥から溢れでてくる愛おしい感情を抑えることなんてできなくなるようです。

セイニャンはふと、この温かく沸きあがる感情がバァンと爆発したあの瞬間を思い返しました。

【出会いからしばらくして】

セイニャンは、ペントハウスのドアが壁に激しくぶつかる音にハッと顔を上げました。

パピブルと出会ってからの短い時間で、このカオスな音がセイニャンにはすっかりお馴染みになっていました。

パピブルは猛突進でセイニャンに駆け寄ると、ひっくり返りそうなセイニャンを見下ろしながら、両手を腰に当ててドヤ顔でポーズを決めました。

「見てセイニャン！今の僕は君とおそろっちだよ！」

パピブルは胸を張り、期待に満ちたしっぽをブンブンと激しく揺らしながら待っています。

セイニャンはパピブルを上から下までじっくりと観察しましたが……いつもとなにも変わらないように見えます。

白い帽子に刺繍されたパステルカラーの月と星のエンブレムまで。

するとセイニャンはあるものを見つけました。

パピブルがいつも被っている帽子の両脇に、白い三角形の物体がのりで雑に貼り付けられているのです。

それはまるで……猫耳？

「帽子に猫耳つけたの？でもパピブルはわんちゃんじゃん！なんでにゃんこみたいに見せたいの？」

パピブルは、うーんと深く考え込み、突然キリッとした表情になりました。

それは、セイニャンが今までに一度も見たことがないくらい、大真面目な顔です。

長い沈黙のあと、パピブルの瞳がカットいっぱいのダイヤモンドみたいにキラキラと輝き始めました。

「これはね、『おしかつ』だよ！昨日セイブルが話してたのを僕聞いちゃったんだ！」



セイニャンはさらに首を傾け、ますます分からないといった様子です。

「はぁ？ なにそれー？なんかおいしそう。それって食べれる？」

パピブルはフンッと胸を張り、わざとらしく「めっ！」と言わんばかりに首を振りました。

セイニャンが知らないことを自分だけが知っているのが、どうやらすごく誇らしいようです。

「ううん、違うんだよセイニャン」パピブルは続けます。

「人間はね、誰かのことがめっちゃ大好きな時、その人のことを『おし』って呼ぶんだ。その『おし』っぽいものをいっぱい集めて、みてみてするんだって！」

パピブルはドヤ顔で帽子をポンポンと叩くと、肉球でビシッとセイニャンを指さしました。

「君は『僕の推し』だよ、セイニャン！ 僕が君のことをどれだけ大好きなのかをみせつけたくて、この帽子を作ったんだもん！」

その瞬間、セイニャンは赤くなったほっぺを、小さな白い肉球で覆い隠してしまいました。「ば、ばか……！ そんなこと大きな声で言わないでよ……！」セイニャンはむくれて言います。

パピブルはセイニャンを真似るように首をかしげます。

その拍子にセイニャン帽子の片耳がヘニャっとパピブルの片目を隠してしまいました。

「なんでだめなの？ もしかして照れてる？」

そう言ったパピブルの瞳がパッと輝き、おなじみのあのいたずらっぽい笑顔が広がっていきます。

そしてパピブルは突然くるりと振り返ると、そのままドアから外へと飛び出し、ありったけの大声で叫び始めました――



「パピブルはセイニャンが大好きー！ パピブルはセイニャンが大好きーーー！」セイニャンもおもわず笑顔になると、急いでパピブルの後を追いかけます。

「しーーっ！ セイブルが起きちゃうー！」

まだちょっと恥ずかしさは残っていたけれど、それと同時に、セイニャンの心はこれ以上ないくらいの大きな幸せで満たされていました。

胸の中の温かい光の種が、お日様のような優しい光を浴びて、大輪のアサガオとなり花開いたのです。

――そして、今のセイニャンにならこの気持ちが何だったのか分かります。

「私も大好きだよ、おばかさん」

【そして現在】

セイニャンは今でもあの時と同じ気持ちを胸に抱いています。

パピブルの顔があのキラキラ輝く笑顔でいっぱいになるところが見たいという強い願い。

その願いがセイニャンを再び奮い立たせました。

セイニャンは小さな足で出せる限りの全速力で走り出しました。

セイニャンの胸がドキドキと脈打つと腕の中の包みとぶつかってしまいそうなほどです。

それでも愛おしい温かさがセイニャンの背中を押すのでした。

「いくぞセイニャン！パーティーだ！」

- パピブル編 -





パピブルのビー玉のような綺麗な瞳は、じっと炉(ろ)の炎に釘付けです。

瞳に映る炎は、まるで彼の胸の中でバクバクと高鳴っている、興奮と緊張をそのまま映し出しているみたいにそわそわと激しく揺れていました。

そしてついに完成しました。

――それは、ブルーからピンクへグラデーションする綺麗な宝石がはめ込まれた指輪でした。

その輝きは、二匹が初めて出会った日の、セイニャンのうるうるした瞳を思い出させます。

「うん、ちょー完璧！ さすが僕！ それで一番大事なのは…ここに文字を刻むこと！」



パピブルは満足そうに愛おしそうに自分の最高傑作を眺めると、丁寧に道具を取り出します。

小さな指輪に沿って、少しずつ、少しずつ文字が刻まれていきます。

『puppyble × seinyan』

「――うわぁっ!?」

パピブルの指先に一筋の真紅が鮮やかに咲き、突然の痛みに思わずキャインッと悲鳴を上げてしまいました。

大慌てで傷口の手当てをしてから、パピブルはついに指輪を完成させました。

「よかったぁ！ 時間ギリギリに間に合った！ セイニャンにこのプレゼントを渡したとき、一体どんな顔をするのか、もう待ちきれないなぁ！ 絶対にめちゃくちゃ可愛いはずだよ！ もしかしたら、感動しすぎて泣いちゃうかも！」

セイニャンがどんな顔をしてくれるかあれこれ想像して、パピブルは肉球を口に覆いながら、ひとりでクスクスと微笑みました。

「セイニャン、気に入ってくれるよね？ この宝石の色、あの子の瞳の色にそっくりなんだ。だって、あの日見たあの子の瞳は……僕が生まれて初めて見た、世界で一番キラキラ眩い色だったんだもん……」

【回想】

「ついに！！ついに今日だ！！」

「セイブルがいつも『セイニャンはすっごく可愛くてすっごく愛くるしいんだよ』って言ってたから……僕、やっとセイニャンに会えるんだ！」

パピブルは鏡の前に立ち、目をまん丸くして、自分の身だしなみを隅から隅まで入念にチェックしています。

「セイブル、本当に大丈夫かな！？僕の毛並み、ボサボサじゃない！？」

「パピブル、それ聞くの、もう6…7回目だよ！ 完璧！かっこいい！心配ないさ！ セイニャンは絶対に君のことを気に入ってくれるよ！僕が保証する！」

パピブルは聞こえているのか、またクシで毛並みを整えだします。

セイブルはそれを苦笑いしながら見つめていました。

(――第一印象はとっても大事だからね！ 僕がどれほどクールで落ち着いた大人なのかを印象づけなきゃ！――)

パピブルは心の中でそう強く意気込んだのでした。

――そうしてやってきたのは、『セイニャン・サファイア・ソワレ』の会場。

会場はたくさんの人々が行き交い、あちこちでグラスの触れ合う上品な音が響き、ピカピカに磨き上げられた革靴やハイヒールが、パピブルの目の前をひっきりなしに通り過ぎていきます。

「わあ！ 人がいっぱいだ！ セイニャンはどこにいるんだろう？」

パピブルはきょろきょろとあたりを見回し、セイニャンの姿を探しています。

すると視界の端っこに、毛先がほんのりピンク色をしたしっぽがチラリと映りました。

そのしっぽの持ち主は、まるで自ら優しい光を放っているかのような、ふわふわした真っ白い毛玉みたいです。

セイブルが後ろで何かを言ってるようでしたが、パピブルはすでに、そのふわふわな毛玉に向かってまっしぐらに駆け出していました。

今まで一度も会ったことがなかったけれど、パピブルにはひと目で分かりました。

「ワンワン！ はじめまして、セイニャン！ 一緒に遊ぼう！」

パピブルはセイニャンの前足をガシッと掴み、会場のあちこちを縦横無尽に駆け回り、夢中になって遊びました。

二匹でこっそりドレミンのコーヒーを盗み飲みして…あまりの苦さにお互いに舌をべーっと突き出して、顔をくしゃくしゃにしかめて見合ったり。

ジールがザーペントにキスしているところにばったり遭遇してしまい、慌てて二匹で肉球で目を隠しながら、大急ぎでその場から逃げ出したり。

デボネアとケイリクスが口喧嘩に夢中になってる隙に、お皿からドーナツをこっそり盗み食いしたり。

「パピブルってすっごく可愛い……」

ぽつりと漏れたセイニャンの呟きが、パピブルの耳まで届きました。

パピブルはトコトコとセイニャンに歩み寄ると、その両手をそっと握りしめ、瞳をまっすぐに見つめます。

そして、これ以上ないくらい誠実で真剣な声で言いました。

「ううん、可愛いのはセイニャンだよ！」

セイニャンの白いほっぺがゆっくりと綺麗なピンク色に染まっていくのを見て、パピブルは心の中で誓いました。

セイニャンをこれから先もずっと隣で守り、一生愛し続けるんだ、と。

セイニャンの前では、無理して大人振る必要も落ち着いたフリをする必要もなかったのです。

ただ、ありのままでいればよかった。

だってセイニャンは、いつもパピブルの隣にいて、ありのままの彼をそのまま受け入れ、彼の夢を常に全力で応援してくれるのですから。

【そして現在へ】

パピブルは初めて、心臓がこんなにも速く、こんなにも大きな音を立てて高鳴るのだと知りました。

パピブルは初めて、自分の居場所を見つけました。

パピブルは初めて、誰かが自分のことを、こんなにも無条件に、こんなにも純粋に愛してくれるのだと感じました。

もっと、もっと成長したい――それはもう、自分のためだけではありません。

いつも隣に寄り添い、支え、時には守ってくれたセイニャンのために――セイニャンの自慢の自分になりたいから。

これは誓い。

パピブルはセイニャンとの約束を一度だって破ったことはありません。

この指輪は、これからの二匹に訪れるすべての出来事の証人となるでしょう。



小さな足で、セイニャンはサプライズの場所へとことこ歩いていきます。でも、すぐに現実を思い知らされました。そこはもう、めちゃくちゃでした。さっき仕上げたばかりの背景幕は崩れかけ、床には、片付ける時間がなかった包み紙や紙くずが散らばっています。

セイニャンは焦っていました。まだ何も終わっていないのに、時間がどんどんなくなっていきます。あたふたと駆け回ります。何をすればいいかわからない。全部がどんどん悪い方に転がっていく。

その瞬間、もうだめだと思いました。

「もう諦めて、謝った方がいいのかな……」

セイニャンは深く息をつきました。心配そうな表情を浮かべながらも、諦めるわけにはいきません。

「だめ！まだ直せるかもしれない。」

そう言い聞かせて、セイニャンはもう一度背景幕を直しました。でもどれだけ時間をかけても、どれだけがんばっても、やっぱりぐちゃぐちゃのままです。

床には、使わなくなった材料があちこちに散らばっていました。紙や風船、もう使えなくなった壊れた道具まで、あたり一面がものでいっぱいです。刻一刻と時間がなくなっていく中、その光景を目にしたセイニャンは、ますます焦り、どうしていいかわからなくなっていきました。

気づかないうちに、目からは涙がこぼれていました。それでも泣いていることにも気づかず、焦りと悔しさでいっぱいになりながら、どうにかしようと必死に動き回ります。

泣いて目がぷっくり腫れたセイニャンは、涙をぽろぽろ流しながら風船をふくらませます。泣きながらも、やっぱりかわいい

それから自分より大きなパーティーハットを持ち上げます。自分より大きなほうきを抱えて、ゴミやくずを掃き集めます。

ふと顔を上げて、ほっとしたのもつかの間——片付いたのは部屋の半分だけだと気づきました。すっかりしょんぼりしてしまいます。

「まだ、間に合うかな……？」もう諦めそうになりながら、もう一度周りを見回しました。

「H……A……P……あれ？Aはどこ？」時計の音が響きます。パピブルが来る時間です。サプライズを計画することが、こんなにも緊張するものだなんて、セイニャンは思ってもいませんでした。

「H PPY BIRTHDAY」と書かれた風船を見つめながら、セイニャンはすっかり落ち込んで言いました。「……ハッピーな日じゃないかも。」

さっきまでのわくわくはすっかり消えて、セイニャンは足を止めました。悲しくて、どうしようもなくて、ただ下を向いて、何がいけなかったんだろうと考えていたら——

「お誕生日おめでとう！」

大きな声に思わず顔を上げました。そこにはパピブルが立っていました。パーティーハットをかぶって、にかっと満面の笑み。うきうきした様子でしたが、泣いているセイニャンを見た瞬間、はっと表情が変わって、すぐにセイニャンのもとへ駆け寄りました。

「どうしたの？何があったの？どこか痛い？なんで泣いてるの？」

パピブルは慌てたようにセイニャンのもとへ駆け寄り、必死になぐさめようとしました。

「……」

セイニャンは黙ったままです。サプライズを贈りたかった相手がもう目の前にいます。ぐちゃぐちゃの部屋も、泣いてる自分も、全部見られてしまいました。パピブルの心配そうな声を聞いたら、セイニャンはもっと大きな声で泣き出してしまいました。

パピブルは慌てました。いつも元気でにぎやかなセイニャンが、こんなふうに落ち込んでいることに戸惑います。

周りを見渡せば、このサプライズのためにどれだけ頑張って準備してきたのかがわかりました。それでも、泣いてほしくはありませんでした。

「もう十分頑張ったよ。ほら、セイニャンがここにいてくれるだけで、それだけでプレゼントみたいなものだよ。」パピブルは、うつむいているセイニャンを見ながら言いました。

「この世界で、君より大切なものなんてないんだよ。だから、笑って！」

「……本当に？」

「うん！！　それに、まだ直す時間はあるよ。ほら、元気出して！」パピブルは元気いっぱいに背を向け、一生懸命準備してきたサプライズを見つめました。

これまで起きたことにすっかり落ち込み、途方に暮れていたセイニャンは、ためらいながら言いました。「でも、もうこんなにぐちゃぐちゃなの見ちゃったよね……。本当は、最初はもっときれいだったんだよ。」

パピブルはセイニャンをなぐさめ、二匹でもう一度、セイニャンが準備していたサプライズを作り直すことにしました。

「じゃあ、もう一回一緒に準備しながら、楽しくやろうよ！　僕はそうしたいな。セイニャンも一緒にやろう？」

「うん！」セイニャンはうなずき、少しずつ表情も和らいでいきました。

しばらく二匹でサプライズを直したあと、目の前の光景を見つめました。セイニャンはまだうつむいていました。サプライズを完璧に仕上げられなかったと思っていたのです。

謝ろうとする前にパピブルのほうを見ると、パピブルは踏み台の上でつま先立ちになり、小さな手を背景幕へ一生懸命伸ばしていました。その手には、なくなっていた「A」の文字が握られています。



「ハッピーな日だよ、笑って！」励ますような満面の笑みで、そう言いました。

その背後には「HAPPY BIRTHDAY」の背景幕がありましたが、パピブルの体に隠れていて、セイニャンからは小さな腕を一生懸命伸ばしている姿しか見えません。

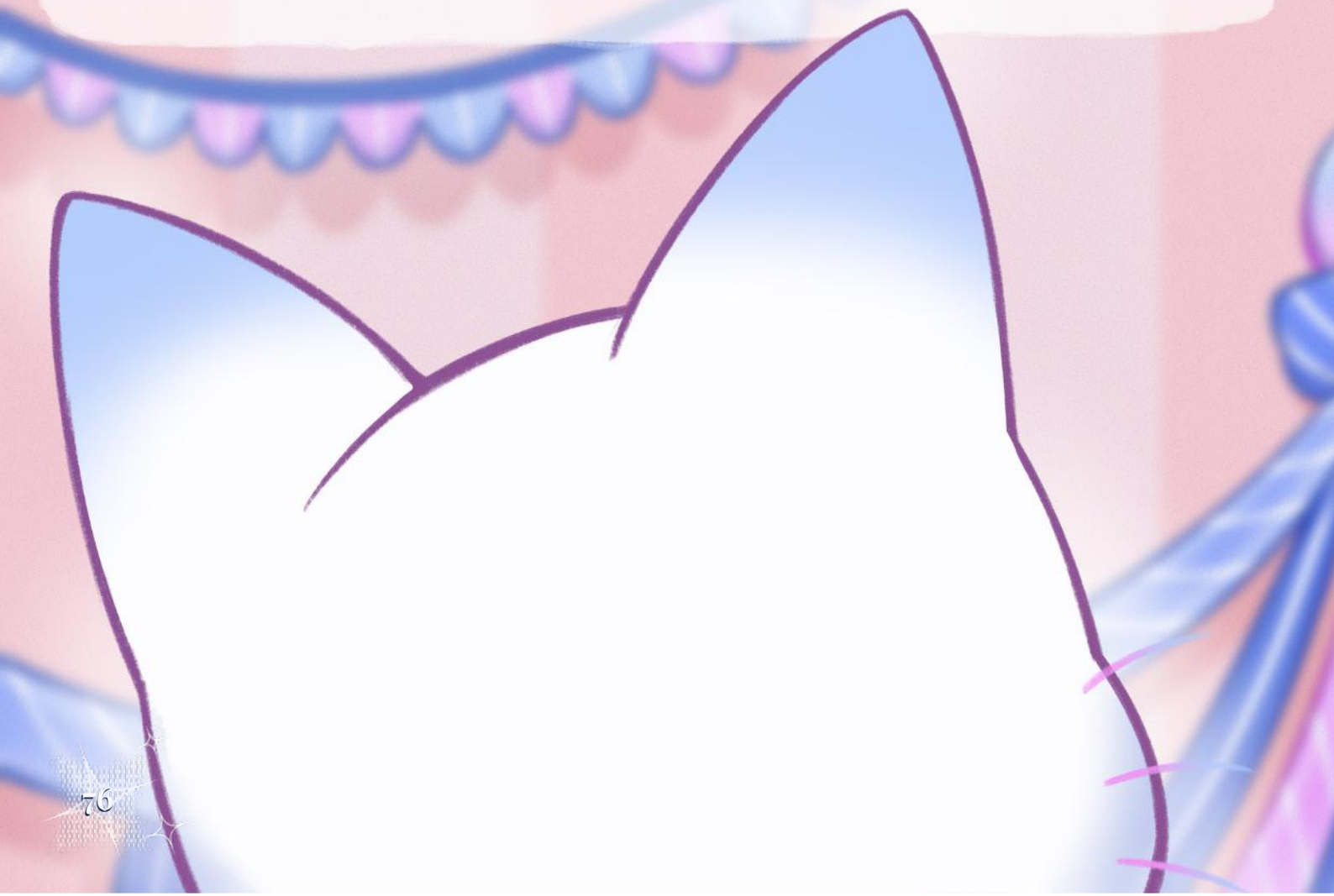
まだサプライズの完成した姿は見えないまま、セイニャンは嬉しそうに笑いながら、顔に残った涙をそっとぬぐいました。そして、パピブルは踏み台から飛び降りました。

「待って！もう一回やろう！」

それだけ言って、パピブルは外に走っていきました。セイニャンはきょとんとしています。しばらくして、ドアがまた開いて——

「お誕生日おめでとう！」またパピブルでした。さっきと同じシーンの再現。でも今度は、びっくりしたふりをしてみせました。

セイニャンは今にも泣き出しそうな表情を浮かべましたが、やがて満面の笑みを見せました。そして二匹は、今度こそ完成したサプライズの全貌を見渡しました。





- パピブル編 -

パピブルは家中を走り回り、全部ちゃんとできているか確認していました。完璧じゃなきゃだめだ、全部完璧じゃなきゃ。セイニャンには最高のサプライズしかふさわしくない。

僕がちゃんと届けるんだ。でも、もし用意したサプライズをセイニャンが気に入らなかったら？それが一番の心配でした。セイニャンのことはよくわかってる。好きなものも嫌いなものも、何もかも。ひげの本数だって知ってる（17本。でも誰が数えてるんだって話だけど）。

それでも、やってることが足りないんじゃないかっていう不安は消えませんでした。もしセイニャンがサプライズを見て、足りないって思ったら？ もし、僕のこと大事に思ってくれてないって感じて、離れていったら？ もし……もし、友達として失格だったら？

だめだめ！嫌な考え、あっち行って！失敗なんてするわけない、ぜったい！「わん！セイニャンは気に入ってくれる、ぜったい！」両手をぐっと突き上げて、セイニャンがどんな顔をするか、どれだけ喜んでくれるか想像してみます。あとは現実にするだけだ。

ドアがきしむ音と、聞き慣れた足音が聞こえました。セイニャンが帰ってきた！

急いで用意しておいたパーティーハットを手に取ります。ピンクと青、プロモーターと同じ色です。紐で頭にくくりつけて、落ちないようにしました。パピブルは深呼吸してから、セイニャンがいるはずの場所へ飛び出しました。

「わんわん！お誕生日おめでとう！」大好きなセイニャンに向かって全力で叫びながら駆けていきます。でも、セイニャンが泣いているのを見て足が止まりました。がっくりした表情、完全にしょげきった顔。

「どうしたの？」サプライズのことなんて全部吹き飛んだ。セイニャンをぎゅっと抱きしめます。そんなの関係ない。セイニャンが泣いてる、それ以外に大事なことなんてない。

セイニャンはパピブルの言葉でさらに泣き出してしまいました。抱きしめられると、とろけるように体を預けます。「サプライズ……サプライズ作りたかったのに……」涙がパピブルの毛を濡らしていきます。「でも……全部めちゃくちゃになっちゃった……！だめだった……！」

パピブルの胸がぎゅっと痛みました。「大丈夫、大丈夫だよ、直せるから、ね？泣かないで」小さな声で言いました。大好きなセイニャンが泣いてるところなんて、ぜったいに見たくなかった。セイニャンにはいつだって元気でいてほしい。

「僕が手伝うよ、ね？みんなも呼ぶから」パピブルはプロモーターが外出中に使っていいよって置いていった電話を取りに行きました。デボネア、ザーペント、ドレミンはすぐに駆けつけてくれて、三匹とも全力で手伝ってくれました。

セイニャンがまだしょんぼり鼻をすすっていなかったら、パピブルはきっと笑っていたでしょう。手足がないザーペントが物を運ぶのに苦戦する姿とか、小さすぎてすぐ迷子になるドレミンとか、パピブルが焼いたケーキを食べないようにデボネアを出禁にしなきゃいけなかったこととか（結局ドレミンに見張りを頼んだけど）。でも今のパピブルには、セイニャンをもう悲しませないことしか頭にありませんでした。

「でも、サプライズが……」セイニャンが鼻をすすります。「めちゃくちゃで……もうバレちゃう……」

パピブルはそっとため息をつき、セイニャンの手を取って外に連れ出しました。「僕ここで待ってるから、そしたらサプライズ準備しても僕にはわからないでしょ！」キッチンの明らかなぐちゃぐちゃと、冷蔵庫の中のケーキにセイニャンが気づかないことを祈りました。

セイニャンはうなずいて、パピブルをぎゅうっと抱きしめました。「ここで待っててね！ぜったい最高のサプライズにするから！」

それからしばらくして、三匹の友達が家から出てきました。三匹とも意味ありげにニコニコしています。「楽しんでね～！」デボネアがそう言い残して、三匹は足早に去っていきました。パピブルは深呼吸してから家に入り、電気をつけました。

目の前にセイニャンが現れました。手にはプレゼントを抱えています。きれいでした。パピブルはうまく言葉にできませんでした。ぐちゃぐちゃでめちゃくちゃで、完璧なんかじゃ全然ない。でもセイニャンが作ったものだ。セイニャンが一生懸命がんばって、泣きながら作り上げたものだ。だからパピブルの目には、最高傑作に見えました。

「サプライズ！お誕生日おめでとう！」セイニャンがにっこり笑います。まだ目に涙が浮かんでいました。パピブルはうれしくてわんっと吠えて、セイニャンに飛びつきました。さっきよりもっときつく抱きしめます。プレゼントを壊さないように気をつけながら。「すっごい好き！わんわん！セイニャンのこと大好き！」セイニャンの毛にすりすりしてから、自分のプレゼントのことを思い出しました。

「待って！僕もあるの！ここで待ってて、わんわん！」キッチンに走っていき、冷蔵庫のケーキがまだ無事なのを見てほっとしました。ドレミンがデボネアを食い止めてくれたおかげです！急いでケーキにろうそくを立てて、火をつけて持っていきます。「セイニャンもお誕生日おめでとう！」

二匹で一緒にろうそくを吹き消しました。二匹とも泣いていたけど、聞かれたらぜったい泣いてないって言い張るでしょう。

ケーキを切り分けて、友達の分とセイちゃんたちの分を取り分けてから、二匹で残りを食べました。セイニャンがソファでパピブルにもたれかかります。くちびるに満足そうな笑みが浮かんでいました。「ねえパピブル、今日はほんとにありがとう」パピブルが寝たと思ったころ、小さな声でささやきました。「大好きだよ、パピブル」

そのまますうっと眠りに落ちました。パピブルが実はまだ起きていたことを、セイニャンは知りませんでした。ただ目を閉じて休んでいただけだったのです。パピブルはそっと手を上げてセイニャンの頭を撫でました。とびきり愛おしそうな目で、小さく答えます。「僕も大好きだよ、セイニャン。ずっと、ずっと」

夕日が窓を黄金色に染める頃、ペントハウスはようやく静けさを取り戻し、めちゃくちゃになった部屋も……どうにか片付いたでしょうか。

壁の飾りは少し斜めに垂れ下がり、風船の色はちぐはぐしています。

ケーキは片側に傾いていて、床の甘い匂いのする何かはラグで隠されています。

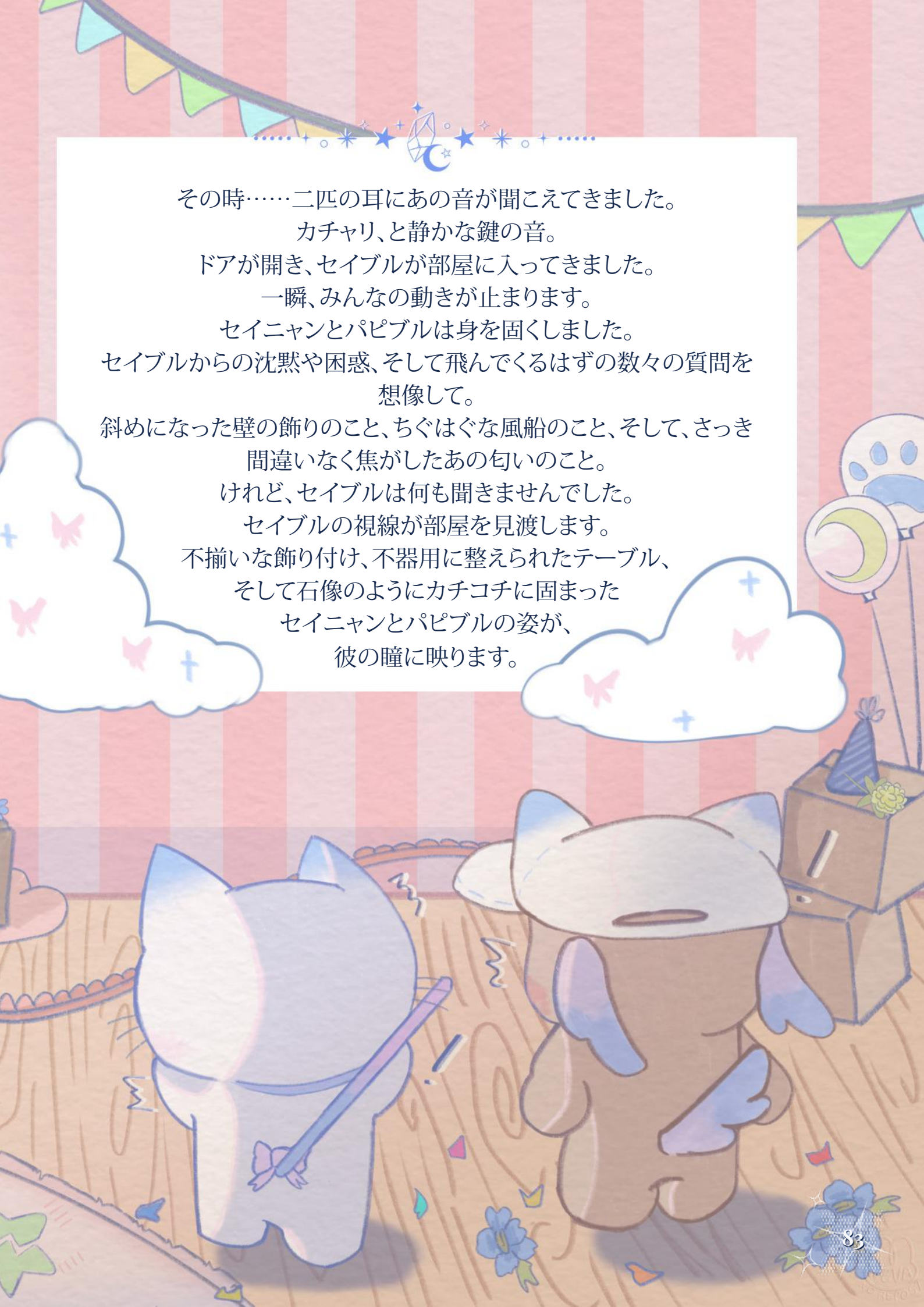
ダイニングテーブルの上では、セイニャンがへにゃとなったパーティーハットを持ち、その横ではパピブルがケーキがまた倒れないようにと祈るように見守っています。



第六章



その時……二匹の耳にあの音が聞こえてきました。
カチャリ、と静かな鍵の音。
ドアが開き、セイブルが部屋に入ってきました。
一瞬、みんなの動きが止まります。
セイニャンとパピブルは身を固くしました。
セイブルからの沈黙や困惑、そして飛んでくるはずの数々の質問を想像して。
斜めになった壁の飾りのこと、ちぐはぐな風船のこと、そして、さっき間違いなく焦がしたあの匂いのこと。
けれど、セイブルは何も聞きませんでした。
セイブルの視線が部屋を見渡します。
不揃いな飾り付け、不器用に整えられたテーブル、
そして石像のようにカチコチに固まった
セイニャンとパピブルの姿が、
彼の瞳に映ります。



そして、セイブルはすべてを察したように、優しく微笑みました。

「二人とも、頑張ったんだね」

セイブルは温かい声で言いました。

セイニャンはすぐに首を横に振りました。

「あ、あのね！違うの！…いや、違わないんだけど…で、でもっ」

「あのね！僕ら挽回しようとしたんだ！」

パピブルが慌ててセイニャンに続きます。

「そしたら、余計ひどくなって、それからちょっと良くなって、だけどまたひどくなっちゃって、それでっ」

セイブルはふふっと微笑みました。

「完璧だよ」

その言葉に二匹はピタッと止まります。

「完璧？」

セイニャンがオウム返しに答えます。

セイブルは部屋の中へと進み、テーブルの上に何かをそっと置きました。

それは小さなリボンで綺麗にラッピングされた箱でした。

めちゃくちゃになった部屋の中でその箱だけが、少しの乱れもなく美しく輝いて見えます。

「今日１日どれだけ頑張ったのか、よく分かるよ」

セイブルは微笑みながら続けます。

「お互いのために、ね？」

セイニャンはパピブルをちらりと見つめ、パピブルもセイニャンをちらりと見返しました。

「あ……」

パピブルが声を漏らします。

「……あ」

セイニャンも同じように声を漏らします。

セイブルはその小さな箱を持ち上げ、二匹の間に差し出しました。

「これは二人へのプレゼントだよ」

二匹は一緒にリボンをほどきます。

中に入っていたのはシンプルなものでした。

2つに分かれた一対の小さなチャーム。

2つを合わせるとぴったり重なるようになっています。

セイニャンが手にしたのは四芒星(しぼうせい)のような形のチャーム。

パピブルが手にしたのは三日月のような形のチャーム。

「何でもかんでも、上手くやろうとしなくていいんだよ」

セイブルは優しく語りかけます。

「ただ、お互いを想って傍にいること。それってなによりも価値のあることだと思わない？」



その瞬間、長かった1日の中で起きたすべての出来事が、二匹の胸の中を駆け巡りました。

デボネアやドレミン、ザーペントたちに助けを求めて走り回ったり、飾り付けに納得できなかったり、とんでもないことになったサプライズに、頑張って片付けて、泣いて、笑って……そして、ようやくたどり着いたこのパーティー。

傾いた飾り付けでもいい。

倒れそうなケーキでもいい。

隠しきれてないめちゃくちゃな部屋だったって、本当はどうでもいいことだったのです。



二匹がお互いを見つめて微笑み合うと、部屋の空気がなんだかポカポカしてきました。

セイニャンはパピブルにそっと寄りかかります。

パピブルはセイニャンにそっと優しくもたれ返しました。

「お誕生日おめでとう」とセイニャンが言うと

「お誕生日おめでとう」とパピブルが返しました。

完璧とは言えないけれど、とても幸せで、愛に満ちた彼らの家。

そこに3人で寄り添いながら、セイブルは微笑んでいました。

なぜか、この愛おしい景色こそが、彼がずっと夢見ていた「あるべき姿」そのものだと感じたのでした。



